愚考考古学（二）

佐伯チリメンと魚付保安林

中林幸夫
（会員・佐伯市長島町）

大根おろしにチリメンを入れて、ご飯の上に置くと、朝の食事にすがすがしさを感じる。

潮の香りと塩の甘さが日本人に合うような気がする。すし・天ぷらが好きという外国人の話は聞くが、チリメンが好きという話は聞かない。

徳川家康は、一富士・二鷹・三茄子が好きだと云われているが、多分、茄子の初漬けの塩の甘さによったのではなかろうか。家康が佐伯チリメンを食べていたら、チリメンも話題になっていたかもしれない。

それではチリメンを日本人が食べ始めたのは何時ごろだったろうか。

昔に遡れば、『魏志倭人伝』（西暦二三八年）に、人は水に沈みて魚蛤を捕らえるとの記録や、海彦山彦の神話になったり、遺跡の貝塚等から、我々の先祖は古くから海の生物を採捕して食べていたことは想像できるが、チリメン等の小魚を食べていたかどうかは分からない。

チリメンは鰯の稚魚で、鰯は成長段階で次のように大別されている。

チリメン（生まれてから約半月、一から二センチ）
シラス　（半月から三ケ月、約三センチ）
イリコ　（三ケ月から六ケ月、約五センチ）
イワシ　（六ケ月以上の成魚）

イワシの種類は、マイワシ・片口イワシ・ウルメイワシの三種類である。

鰯は、プランクトンを餌にして成長し、その殆どが鰺・鯖・鰹・ぶり等の大型回遊魚の餌となり、最後まで成長するものは、産卵時の全体の七分の一といわれている。即ち、鰯は他の魚にとってはなくてはならない餌の存在

であり、弱肉強食の自然の摂理である。

この自然の摂理である生態系を人間が崩してはならないのであるが、現代の漁業は価値観の高い魚の稚魚だけを放流して、自然の生態系を崩していこうとしている。

それに比べて昔（江戸時代）の人は、魚は生い茂る樹木の物陰や、木から落ちる昆虫や落葉に発生する微生物を餌として集り、そこに産卵する性質があることから、海岸の樹木を守らねばならないとして、幕府や各藩では海辺の樹木の伐採を禁止し、住民もそれを守った。

その名残が、明治以後も森林法という法律によって受け継がれ、魚付保安林として指定され、現存し、伐採を禁止している。

前に返るが、チリメンを捕るには網が必要である。このことからチリメンは、多分、江戸の中ごろから食用にされたのではないかと思う。それというのは、網で捕る漁業の始まりは江戸時代で、鰯等を大量に捕るため地曳網が発達している。

その網による漁業について佐伯周辺の記録を探してみると、

一　文化十三年（一八一六）蒲江町蒲江浦の松次郎、棒受網を日向から導入、鰯・鯖・鰺を捕るのに効果をあげた。

二　文政三年（一八二〇）米水津村小浦の為八、鰹張揚網を成功させた。

三　天保七年（一八三六）蒲江町西野浦、中塚中左衛門、曳網に落し網を加えることに成功した。

四　天保九年（一八三八）上浦町浅海井浦、平五郎、其の浦に適した地曳網を作るに成功した。

とあり、網漁業は江戸時代に発達している。

江戸に幕府が開かれてから、江戸に人が集中し始めて魚の消費が増大した。当時の食生活は、肉食がないので魚は最高のものであった。落語に出てくる目黒のサンマや鰯の煙は、この上ないご馳走だったと思われる。

幕府は、食生活に魚が必要なことから、正保元年（一六四四）ツクダニで有名な佃島の干潟地を漁民に与え、漁業の発達していた近畿・摂津の漁民を移住させて、漁業の振興を計っている。

江戸に人が集中する以前は、大阪に人が集中していた関係で、近畿の漁業が発達していた。現在のように冷蔵庫のない時代は、消費地と生産地は近接していなければ

ならなかった。

地曳網の発達で鰯等が大量に捕られるようになり、鰯は食用の他に魚油の採取に利用され、粕はホシカと呼ばれ、良質の肥料になることから棉の肥料として全国で使われるようになり、綿の生産が向上して織物が盛んになった。

佐伯地方でも同年代に地曳網により漁業が行なわれ、佐伯のホシカは良質として瀬戸内周辺から大阪方面まで送られていた。

「佐伯の殿様浦でもつ」

と言われたのはこのころからで、享保十五年（一七一〇）の記録では、沿岸漁業から上がる運上金は四百七十六貫に達し、米に換算すれば約九千五百石になったという（佐伯の禄高は二万石）。

佐伯藩では、船は勿論、使用する網、製品、浦々の網代、製品を干す干浜まで徴税の対象としたため、藩の収入は増大したが、漁民の生活は豊かでなかったようだ。

このころ、地曳網で捕れた小魚は油も取れないため、干魚として食用に供され始めた。チリメンのはじめではなかろうか。

魚付保安林は、佐伯周辺では佐伯市霞ケ浦の大宮八幡の下辺りが指定されているが、ヘドロ化が進み、魚の産卵に適しない状態になっている。

毎年、大宮八幡のホーライエンヤがテレビ等で取り上げられ、伝統を守ろうとの声はあるが、保安林やその周辺の海岸の樹木を守ろうとの声は、あまり耳にしたことがない。

江戸時代でさえ記録を見ると、

明暦元年（一六五五）、元禄十二年（一六九九）及び享保十年（一七〇五）に江戸市中のゴミは永代島の築地内に捨てることを布告し、また、安政六年（一八五九）には、川中へのゴミの投棄を禁止する布告をしている。

我々はもっと先祖の残した環境や考えを知り、子々孫孫まで神の与えてくれた自然環境を残したいものだ。

本稿は、自然環境の保全を叫びたくて、取りとめのないことを書いてしまいました。

以前、大入島の方から板で作った船鑑札を見せてもらったことがあります。佐伯方面の漁業の元祖かもしれま

せん。

最近、佐伯湾の海の色も美しくなり、佐伯ダイビングクラブ（会長　谷川憲一）では、竹ケ島周辺海底でサンゴの自生を確認しているそうです。最北端のサンゴになりますか。

潮の香の　チリメンかけて　なお一膳

短歌　城山の四季に題す

佐保為信

（会員・佐伯市来島町）

独歩にも会えそうな道夏木立緑陰の坂登りつ憶う

「春の鳥」想いを馳せて城山（やま）登る木洩れ陽受けてたどる山道

名札ある城山の樹々茂りおり涼しさにいてとく去り難し

木の葉舞い海を背にして独歩の碑城山に見る古跡寂莫

「源おじ」も眺めし海か五月晴れ城跡（しろ）より望む佐伯湾岸

城山や樹林の上を鳥の群輪をえがき飛ぶ山の彼方に

城山を盛り上らせてシイ青葉万緑の山まろく満たして

城山の独歩の秋に来ておりぬ吾も愛すや城山の景

城山や雄池雌池の水温む水際に見るサンショウウオを

武家屋敷初夏の山際たたずめば藩の倉跡偲ぶ「お倉（くら）の井（い）戸（ど）」